

言葉の力

5月18日は「言葉の日」です。

こんな日があるなんて、私は知りませんでした。それで、何故この日が「言葉の日」なのかというと、5と10と8の単なる語呂合わせらしいのです。誰が考え出したことなのか分かりませんが、この機会に、普段何気なく使いお世話になっている「言葉」について考えてみることは、とても大切なことのように思います。

一体「言葉」とは、何なのでしょう。

広辞苑の力を借りると、まず「言語」については、「音声又は文字を手段として、人の思想・感情・意志を表現・伝達し、また理解する行為。また、その記号体系」とあります。

次に、「言葉」を引いてみると「意味を表すために口でいったり字に書いたりするもの」とあります。簡単にいうと、自分の考えを表現する道具ということだと思いますが、そうはいつでも私は、その道具の扱いにてこずる日々です。

だから、「時計の針が前に進むと「時間」になります。後ろに進むと「思い出」になります。(寺山修司)」なんていう言葉に触れるとぞくぞくしてしまいます。

「他人が困っているときに優しくできるか。幸福のすぐ隣に哀しみがあると知れ。大人になるとは、そういうことだ(伊集院静)」なんていう言葉を聞くと、胸が熱くなります。

自分の脳みそをどう絞ってみても、こんな言葉は出てきそうにありません。

作家の片岡義男氏は、「あなたとはいったい、なにですか」という問いに対して、自分の個体を指しながら「僕とは、この自分です」といういい方があっても良いが、答えにはなっていない。「個体のなかに宿る言葉こそが僕なのだ」といっています。確かにその通りだと思います。

私は今、ほぼ毎日のように「塾頭通信」を発信し続けていますが、結局それは、私の思いが言葉となって表出したものであり、私自身に他なりません。

今年の本屋大賞の受賞作は、三浦しをんさんの「舟を編む」という作品です。

その作品のなかで三浦さんは「何かを生み出すためには、言葉がいる」といっています。そして、大渡海という大國語辞書の編集部員である岸辺を通して次のように語ります。「はるか昔に地球上を覆っていたという、生命が誕生するまえの海を想像した。混沌とし、ただ蠢くばかりだった濃厚な液体を。ひとのなかにも、同じような海がある。そこに言葉という落雷があってはじめて、すべては生まれてくる。愛も、心も。言葉によって象られ、昏い海から浮かびあがってくる。」

私は、周りの方から「塾頭通信を毎日書くというのは大変でしょうね」といわれます。確かに、毎日、悪戦苦闘しながら言葉を連ねているのですが、もしも「言葉」というものがなければ、私は、確たる自分に出会うことが出来なんでしょうし、塾頭通信を書くことを通して新しい自分と出会うという喜びも味わうことが出来ないに違いありません。

勿論、「言葉」というものは誠に不思議な存在で、まるで石ころのように無機質であるかと思えば、それ自体が生き物のように一人歩きしたりする。だから「言葉」を使うことは難しいのだと実感しています。

「言葉には力がある」とよくいわれます。それでは「言葉の力」の源は何なのでしょう。

国語の辞書づくりをされているフリープロデューサーの藤岡和賀夫氏は、「言葉の力」は、「環境としての力」であり「風景の力」であるといっています。人々が生まれ、育ち、生活する、その営みの力こそ言葉の力だということです。環境としての風景に力があれば、「言葉」も力を失うことはないでしょうが、彼は「その大切な風景が、間伐が過ぎた森のようにどんどん痩せてきている。」と懸念を表明しています。

「言葉」を大切にするという事は、日々の暮らしの中で、これまで息づいてきた風景を大切にしていけることでもあるのだと感じています。

(塾頭 吉田 洋一)